

No. 83
2024. 春

世田谷文学館 ニュース

SETAGAYA LITERARY MUSEUM

館長の作家対談

ゲスト 辻原登（作家、神奈川近代文学館館長）



小堀杏奴《静物(雑飾り)》、油彩、1934年頃 世田谷文学館蔵

なくなくなってしまった。これはもうあかん、生きていけるかどうかも分からんかもしれないという状況の中で、将来どうしたらいいのかという毎日を送っていたのです。それでドストエフスキーを読むわけです。トルストイやスタンダー・カレリーナの恋愛も、『赤と黒』のジュリアン・ソレルの恋愛も傑作だということは分かるのだけれど、全然身に染みてこない。だけど、ドストエフスキーの『地下室の手記』など色々読んでみると、実際の経験を超えた何か強烈なものがあったはずだとされた、それが15、16歳の思春期のときで以後45歳まで続くのです。だから、普通の受験勉強をして大学に行き、就職することができなくなった。食べていけなくてはいけませんが、結局は表現者になりたかったのです。ドストエフスキーと出会ったことで、才能はないかもしれないけれど、何かを表現することによって自分なりに克服しなくてはいけないという気持ちが強くなった。あとは生活をどう立てていくかという問題で、それからが大変です。

25、26歳ぐらいで就職を考えたときは、ちょうど日本と中国が国交回復をした直後で、中国語のできる人が圧倒的に足りない状況でした。東京外国語大学でもおそらく中国語専攻者は少なかつたと思います。亀山さんの頃はもうでしょう。それが突然国交を回復して日中航空協定ができ、人の往来がものすごく増えると、語学のできる人材が必要になってくる。僕はその目を付けて、中国語ができればどこかに潜り込めると思ったのです。

『村の名前』の魅力というのは、一つはそこに描かれたさまざまなモチーフ、例えば主人公と中国人の女性の抱擁の場面であるとか、あるいは犬料理の宴会のシーンとか、あるいは列車が止まるたびにスイカスイカと叫びながらプラットホームに押し寄せてくる人たち。そういう個々のディテールにあります。ところが驚

フスキーが『罪と罰』を書いた年齢です。いきなり作家としての円熟の頂点がデビューに重なったということです。ある意味で特権的な地位に辻原さんはいらつしやつた。だからこそ、これまで全ての著作で驚くべき高さを発揮できたのだと思います。では、その45年間は一体何だったのか。まずは辻原さんに自由な形で話していただければと思います。

辻原▼はい。45年という、そんな感じですが。亀山▼『村の名前』は中国が舞台で、畳の原材料の買い付けのために主人公が桃源郷に入っている物語ですが、桃源郷というのは名ばかりで、そこは共産主義権力が支配するシステム化された、一種の全体主義的な世界なんです。その世界が読者にそこはかとない不安と恐怖を呼び起こす。

『村の名前』の魅力というのは、一つはそこに描かれたさまざまなモチーフ、例えば主人公と中国人の女性の抱擁の場面であるとか、あるいは犬料理の宴会のシーンとか、あるいは列車が止まるたびにスイカスイカと叫びながらプラットホームに押し寄せてくる人たち。そういう個々のディテールにあります。ところが驚

全体主義というか、そういう中で小説を書いたわけです。彼はシベリアに行き、戻ってきて再生するのですが、僕の場合も、僕自身捕虜ではないですが、中国で仕事をやる限り、常にそういう意識を持っていないと危ないのです。

東京でアルバイト生活をしていた頃、市ヶ谷に夜間の中国語学校があつて、そこを修了すると求人が沢山来るのです。僕は30歳で初めて商社に就職し、15年間、中国奥地を回りながら畳の蘭草やウナギの稚魚を買い付けたり、釣りの餌のゴカイを買い付けたり、松茸を採りに行っていた時期だったのです。その間、猛烈に本を読みたくなり、何か書きたくなった。でもそんな時間は全くなく、朝から晩までお客さんを連れて中国を回ります。ところが、早起きすると仕事前に2、3時間の時間ができることに気づいたのです。そんなことは考えれば当たり前ですが、朝5時に起きれば本を読めるし、物が書けると思つて、ちょうど湖南省・長沙に、畳の蘭草の仕事で2カ月程いたときに書き始めたのです。

くべきことに、エキゾチズムの香りが無い。つまり基本的に小説を支えている雰囲気がある種の全体主義、この言葉はあまり不用意に使用いたくないけれども、ある見えない力に監視され抑圧された世界なのです。その抑圧された社会そのものが下敷きにあつて、その上にタワー侵犯のモチーフが幾重にも重ねられていく。そしてそこから生まれてくる人々の生命の輝きに私は惹かれていたのだと思います。私自身何度もロシア体験を経る中で、システムというか全体主義体制の中で非常にストレスフルな留学生生活を送りました。ところが抑圧が強まれば強まるほどある種の自由というもの、輝きみたいなものがヴィヴィッドに見えてくる。このような言い方ではかなり矮小化されてしまふのだけれども、その抑圧の岩盤と人間一人一人の自由度というのでしょうか、自由さというか、奔放さみたいなものがある、さうして、人語を牽引しているテーマは何かと言つたら、人生そのものの持つ不思議さ、先ほど言った予測不可能性だと思つていい。そこで聞きまして、実際に中国を行き来したとき、辻原さんにはシステムの恐怖というものを実感されたのでした。辻原▼それは、否応なく実感させられました。縁が深いのか両親が戦前、上海にいたものから、僕は中国に対して非常にシンパシーがある。しかし、実際に中国で仕事をしていると、常にそれは意識の外には置けない状況になるのです。だからこそ、僕が常に意識したのはドストエフスキーとカフカで、ドストエフスキーも

亀山▼『村の名前』です。辻原▼はい。45年という、そんな感じですが。亀山▼『村の名前』は中国が舞台で、畳の原材料の買い付けのために主人公が桃源郷に入っている物語ですが、桃源郷というのは名ばかりで、そこは共産主義権力が支配するシステム化された、一種の全体主義的な世界なんです。その世界が読者にそこはかとない不安と恐怖を呼び起こす。

全体主義というか、そういう中で小説を書いたわけです。彼はシベリアに行き、戻ってきて再生するのですが、僕の場合も、僕自身捕虜ではないですが、中国で仕事をやる限り、常にそういう意識を持っていないと危ないのです。

全体主義というか、そういう中で小説を書いたわけです。彼はシベリアに行き、戻ってきて再生するのですが、僕の場合も、僕自身捕虜ではないですが、中国で仕事をやる限り、常にそういう意識を持っていないと危ないのです。

全体主義というか、そういう中で小説を書いたわけです。彼はシベリアに行き、戻ってきて再生するのですが、僕の場合も、僕自身捕虜ではないですが、中国で仕事をやる限り、常にそういう意識を持っていないと危ないのです。



ゲスト
辻原 登
作家、
神奈川近代文学館館長



聞き手
亀山郁夫
ロシア文学者、
世田谷文学館館長

館長の作家対談

デビューまでの45年間

亀山▼最初に私から、辻原登さんとの出会いについてお話をさせていただきます。実は、辻原さんが小説『村の名前』を発表された当時、その書評を読んで非常に興味をそそられたのがきっかけです。以来、辻原さんはどういう人、どういう作家なのだろうかと思ひのようように思い続けてきました。『村の名前』というタイトルに素朴な違和感を覚えたこともたしかですが、刊行の4年ほど前に映画『薔薇の名前』(1986年 原作/ウンベルト・エーコ)が封切られており、そのタイトルとの比較から、『村の名前』という名付け方の魅力に改めて気づかされた記憶もあります。

私から最初に答えのようなものを出してしまいたいと思います。辻原さんの文学の根本テーマとでもいいますか、それは人生の予測不可能性をめぐる物語ということ。全ての小説がある意味この一言で整理できると言つてはおそらく失礼な言い方になりそうですが、でも巨大なモチーフ群を確実にこの言葉で包摂できる。全ての小説はノベルつまり、新奇な事件、この人生の予測不可能性をいかに描くのか。これが少なくとも私が、辻原さんの文学に惹きつけられ続けている力の源泉だということです。この人生の予測不可能性の探求という話を、今日の締めくくりのテーマにしたいと思います。

まず、辻原さんのプロフィールについてひと言述べておきましょう。実は辻原さん、作家デビューが非常に遅いのです。45歳。ドストエ

フスキーが『罪と罰』を書いた年齢です。いきなり作家としての円熟の頂点がデビューに重なったということです。ある意味で特権的な地位に辻原さんはいらつしやつた。だからこそ、これまで全ての著作で驚くべき高さを発揮できたのだと思います。では、その45年間は一体何だったのか。まずは辻原さんに自由な形で話していただければと思います。

辻原▼45年、そうですね。あまり考えたことがないのですが、間違いなく『村の名前』が僕のデビュー作で、それは44、45のときです。今、亀山さんが仰つたように45歳というと、ドストエフスキーが『罪と罰』を書いた頃でしょう。これは大きな差です。大きな差というか、比べ物にならないですが、一番苦しかったのは人間にとつての変わり目、15、16歳の完全に心も体も入れ替わらなくてはいけないこの時期が一番危機的な状況でした。そこから本当の記憶が僕の中にあつて、それは非常にきつい記憶です。みんなそうだと思いますが、この年齢のときに危ないのです。本当に男も女も非常に危ないこの時期に、僕はドストエフスキーと出会つたわけです。例えば父親や身内の死とか失態だとか色々な経験が血肉化されていきますが、実際に体験したからそうなるわけではなく、僕の場合はドストエフスキーを読んだということが、父親の死に出会う以上の強烈な体験で、そこから普通の生活ができなくなった。

僕は和歌山の南の田舎に生まれ、中高は大阪で、一人暮らししながら学校に通い受験勉強をしていました。そして、本を読みながらドストエフスキーと出会うと、もう普通の生活ができ



『家族写真』1995年 文藝春秋



『森林書』1994年 文藝春秋



『村の名前』1990年 文藝春秋

辻原 登(つじはら・のぼる)
1945年和歌山県生れ。1990年「村の名前」で芥川賞、1999年『翔べ麒麟』で読売文学賞、2000年『遊動亭円木』で谷崎潤一郎賞、2005年『枯葉の中の青い炎』で川端康成文学賞、2011年『闇の奥』で芸術選奨文部科学大臣賞受賞。他に『許されざる者』、『鞭轡の馬』、『冬の旅』、『寂しい丘で狩りをする』など著書多数。

全体主義的なものに対する恐怖と愛

亀山▼今、私が質問した理由は、システムというか、全体主義的なもの恐怖が、辻原さんの全小説の中に埋め込まれてしまったというか、完全に内面化されていると感ずるからなんです。その中で、一種の人間の予測不可能性というところに繋がるかもしれないんですが、人間の生命の儂さ、脆さといいますが、そういうすぐくベシミスティックなテーマが表れてくる。辻原さんは先ほどは15、16歳のときに非常に辛い経験があつたと仰いましたが、そうしたものと違ふ、一人の人間として年齢が積み上がったいくプロセスの中で、全体的なものに対するある種の恐怖と、同時に、逆の愛のようなものが生まれたのかもしれない。それが例えば、最新『陥穽』という小説などにも繋がっています。土台なのではないかと思つたりします。今のこの話、実は、先ほど控室で辻原さんがどうして

界、つまりソビエト、ロシアの舞台を描いた作品です。

辻原▼1920年代のことを書いた小説ですが、本当にすごい小説です。19世紀の後半がドストエフスキー作品としたら、20世紀の前半はこれだという感じの小説です。プラトノフの代表作ですが、亀山さんは彼の『土台穴』を翻訳されています、少し紹介を……。亀山▼そうですね。『チェヴェングール』は、死とは何かを探ろうとして湖に身を投じた男を父に持つひとりの青年が、共產主義の理想郷を求めて遍歴する物語ですが、ラストがすごい。ここではこれ以上明かしませんが、プラトノフを貫くテーマは、全体的なものに対する嫌悪と愛。全体的なものが悪の仮面のように全面的に立ち塞がるのか、それとも立ち塞がりながら、人間の幸福とどう繋がっているのか。

ところで、この全体的な体制が常に自分を睨んでいるという恐怖心は、事によると、辻原さんのある種の詩学というか、ポエティクスにも深く繋がっているのかなと思います。『村の名前』は、辻原さんの出発点ですけども、最初の長編小説は『森林書』です。おそらく辻原さんの小説の中で最も知られていない小説でありながら、最も熱度の高いものの一つだと思います。そう言う私も、4分の1しか読めていないのですが、『森林書』では私の故郷・宇都宮を舞台に、ハム(Ham)無線通信で繋がる仲間たちのドラマが描かれています。その中の一人、唯一の女性がヒロインとして最初に浮かび上がってくる。そして、その女性と主人公との間にある種の恋愛が生じ、これは不倫ですけども、

す。つまり、自分ではいい気になって、こういう小説を書いたという気持ちになっていたら、完全に全否定です。どうしたらいいんだろうと。

亀山▼恐ろしい話ですね。

辻原▼恐ろしいですよ。今はそういうことではないですが、丸谷さんとか大岡昇平とか、ああいう人達に怒られて否定されたら、ほとんど全人格がなくなる程のショックです。もちろん尊敬しているからですが、どうしようとなったときに、全然別のことをやろうと思ったのです。それが読売新聞朝刊で連載した『翔べ麒麟』という、阿倍仲麻呂が活躍する歴史小説で実現したのです。『森林書』の書き方とは別の小説の作り方が始まったという感じです。

亀山▼新聞小説というのは、ある意味で日本の近代小説の始まりというか、夏目漱石にしろ、そういう人たちが一つの執筆のスタイルとしたものです。まさにそこから近代の日本文学が生まれたと言っている側面があると思います。新聞小説の作り方についてお話を伺いたいと思います。その前に『森林書』と『悪霊』について注釈しておきます。『悪霊』では、足が悪いマリヤ・レビヤートキナという、聖母マリアと同じ名前を持つ女性が出てきます。且つ、彼女は聖なる女性として「ユロージヴァヤ(神がかり)」と呼ばれるわけです。「ユロージヴァヤ」には語源的に「身体的な欠損を抱える」という意味が隠されており、まさにその聖性と身体的な欠損の象徴的な連関性に着目したのがドストエフスキーでした。ですから、この『森林書』を読んだとき、これは『悪霊』から来ているのではない

その女性は義足なのです。辻原▼くるぶしから下がらない。

亀山▼そのくるぶしから下がらない女性と主人公の恋愛の場面が非常に印象的で、極めてあっさりとした描写なのですが、しかし、かなり濃密なディテールが含まれています。初めての長編小説で足の悪い女性と主人公の恋愛の場面を描くのは、ものすごく勇気の要ることだったと思います。初期の辻原さんの小説には、他に私の好きな『家族写真』がありますが、どう見ても読者を挑発するというか、これもまた単に性愛の描写だけではなく、ありとあらゆる手段を用いて読者を挑発しようという意欲が漲っている。どのようにしてこの小説が生まれたか、紹介して頂きたいです。つまり、今ある辻原さんの作家としてのスタイルの出発点がここにあるわけですが、辻原さんの作家的変貌の出発点



かなとピンと来て、この場で是非とも質問したいと思っていました。

では少し話を進めます。辻原さんの場合、新聞小説をどのように書いていくのかとても興味があるのです。最初に全文が出来上がり、それを新聞社に渡すのかなと空想したりするのですが、辻原さんの小説執筆スタイルとして付箋紙を利用するというのを聞いたことがあります。どういう書き方なのですか？そうした執筆スタイルから、どうしてこういう小説が生まれるのか。その謎を辻原さんご自身に聞いてもらいたいと思います。

小説と建築の関係性

辻原▼今も僕は手書きですが、一つの小説を考えるとき小説というのは建築と似ていると思

もここにあるのではないですか。

辻原▼『森林書』は、文芸誌「文学界」に連載しましたが、それは僕にとつて芥川賞受賞後の長編小説で、やろうとしたのは、とにかく挑戦的というか、読者を驚かすような作品を書きたい。仰つたように、『村の名前』は監視社会ですが、『家族写真』は実にウエルメイドなほろりとしてもらせる小説、と言つたらおこがましいですけども、少し思い切つたことをしてみようと思いました。

僕は15、16歳のときにユートピアに興味があつて、山岸会にいたのです。いわゆるアナキストの集団で、鶏を飼いながら幸福社会を実現するというグループで、山岸巳代蔵という京都のアナキストがお百姓さんたちを集めて、ユートピア社会を作るといふ運動でした。会の本部が三重県の伊賀上野、芭蕉の生まれたところにあつて、僕はそこに参画し、

伊賀上野から大阪の高校まで、関西本線で2時間半程かけて通う生活をしていました。その頃からユートピアとか集団、監視社会というものに、自分がその中に入ることも興味があつた。だから、この小説ではそういうユートピア社会の破綻を描きたいと思つた。でも、普通に人間が地上でうろろろしているよりも、空中でやり合う方が面白いので、ハム愛好家たちが集まり、イギリスのキツネ狩り「フォックスハンティング」というゲームを、空中でするのです。小山なり真岡、宇都宮などの関東平野のどこか

うんです。例えば世田谷文学館を建てる時、どういう目的と規模で、どういう建物にするかということも多くの人が集まって構想します。予算や工期の問題もあるし、構造計算をして実際に建つように図面を書いて、空間の中に立体的なものを作るわけです。つまり、空間ですけども、建築物はただ建てるだけではなくて、使う人のことを考えなくては行けない。すると、その建築物は空間だけではなくて時間の要素も持たなくては行けないわけです。例えば、安藤忠雄さんにしても、ただ建物を建てればよいとは、考えていません。彼は、建築物をほとんど夢の中で考えたと話していたのですが、これはすごいなと思つて、つまり、寝ていて考えるということ。眠っているけれども起きている、それはどういうことか説明できないけれども、とにかく夢の中で建築物が出来上がる、と云うのです。実際、昼間は建築屋と交渉するけれど、具体的イメージは、ほとんど夢の中で出来るが、それがなかったらいいものにはならないと聞いて、小説と一緒やんかと僕は思つたのです。

建築は空間の中に時間を通すこと。小説は、基本的には時間の技術、つまりストーリーです。時間流れるように作つた上で、それを空間化しなくては行けない。実際にそこで登場人物たちが生きて食べたり、話したり、そういう場面が設定されていかななくては行けない。小説における空間というのは場面です。小説

にフォックスを隠したことにするのです。その隠したフォックスを、ハム仲間の20、30人が空中戦をしながら車で探し、誰が最初に発見するかというゲームで、空中で人間同士が欲望をぶつけ合いながら、「空の魚たち」というグループの名前なのでですけども、最後には破綻していくという話です。そこには、女神が必要なのです。つまり、中心になる女性。その女性をどういう女性にしようかと思つたときに、これは偶然ですが亀山さんが住んでいたすぐ近くに小乙女ことめという女性がいて、彼女は、宇都宮高校かどこかの高校教師の妻なのですが、かかとか下がらないという設定です。ハムの仲間たち、夫もその一員ですが、彼らは踵から下がらないことにエロチックな興味を覚えて、彼女を最終的に誰が獲得するかという話に展開していきます。そして最後に破綻する、そういう話なのです。

亀山▼かなりドストエフスキー的ですね。例えば、『悪霊』なんかはまさに足の悪い女性が物語の中心になって尚且つ聖女としての役割を担う、ひよつとするとその発想そのものの中にドストエフスキーがあるのかな……。

辻原▼これは『悪霊』です。『悪霊』をパステイシユした感じですが、先ほど亀山さんが仰つていた展開というのは、つまりこの小説連載が終わつて、1冊の本にまとめたとき、『村の名前』を評価して芥川賞の選考で強く推してくれた丸谷才一さんが、僕がこの小説を送つて数日後の電話で「君、こんな小説を書いたら駄目だ、出直せ」と怒るのです。丸谷さんという人は非常に真剣に怒る。僕は震え上がったので

を基本的に成立させているのは時間で、その時間を成立させるために場面がなければ小説は組み上がらない。建築物と逆ですが構造は一緒です。すると、建築家の設計の仕方は分かりませんが、安藤さんは夢の中でやるというので、すけれども、僕もほとんど夢のような感じで、夢に見たものを朝起きたら付箋紙に書き付けていくのです。枕元に大・小の付箋紙をいっぱい置いておき、書きためてB4ぐらいの紙に貼り付けてコピーをとるのです。というのは、とらないと外れちゃいますから。そのコピーを畳んでポケットに入れ、電車に乗りながらじつと眺めていく。眺めているうちにだんだんストーリーが生まれてくる。ストーリーが生まれてきたら、それをもう一回紙に書き、次にディテールと場面が生まれてくる。場面には誰と誰がいてとか、それをまた付箋紙に書き留めていく。そういう作業を何回も繰り返してある程度全体が出来上がった時点で、ではこの1週間分を書くのはどの付箋紙が要るかなと思つてもう一回ストーリーに従つて付箋紙を並べ替える。その付箋紙の中身は描写であつたり、心理であつたり、場所も一個一個混ざっているわけです。一つ一つが全然違います。それを置いてコピーをとり、じつと眺めながらやつと書き始める。だから、そんなに早い書き方ではないです。

亀山▼すると、終わりの場面を想定しつつ、最初から時間軸に沿って書いていくという書き方はなさらない。いったん付箋紙に……、これはかなり空間的な作業ですね。

辻原▼空間的作業で、時間ではないですね。

亀山▼物語の図面化！時間的作業というのはないのですか？

辻原▼それは書くことです。書くことが時間を流すことです。つまり、書くあるいは読むという作業です。読むと書くということは、時間の中でしか起き得ないことです。今仰った構造物というものをストーリーにしていって、一つの読めるものにするということは書くということですが、それは時間を流す、時間を立ち上げさせるということになるのです。でも、それで上手くいくわけではなくて、時間というものは常に渋滞するものです。

辻原さんのポエティクス

亀山▼執筆スタイルを伺ったのですけれども、辻原さんのポエティクスというのは、詩学の中にパステイシユという手法がありますよね。パステイシユは物語の空間を2倍、10倍、100倍にも拡大させていく力を持っている。だから、パステイシユの威力は蔑ろにできないと私は常々思っているのです。パステイシユには2種類あると思います。物語のパステイシユと歴史のパステイシユ。物語はストーリー、歴史はヒストリー、ロシア語だとイストリーアという同じ言葉が使われますが、物語におけるパステイシユでは、例えば実際に「ヘンリー・ジェームスの『ねじの回転』が『抱擁』に取り込まれたり、『冬の旅』ですとトルストイの『にせ利札』あるいは映画の『ラルジャン』がうまく取り込まれたりするわけです。しかしこれらはいずれも物語同士の関係性です。その一方で、例えば

いという言葉がありますよね。やはりいけないのです、運命について書くのは、本当はいけない。でも、ドストエフスキーぐらいその問題について考えた人はいないと思います。というのは、運命というのは偶然という意味と二緒なのです。ドストエフスキーの『罪と罰』では、ものすごく偶然を使っています。例えばラスコーリニコフとソーニヤが、僕だったら絶対に出会わせないような場面でちゃんと出会うのです。ラスコーリニコフがセンナヤ市場を歩いているときに、老婆の姪っ子がちょうどこの日居ないことを耳にする。「この日姪っ子が居ない、老婆は一人だ、だから殺せる」と。これを全部、偶然耳にするわけです。つまり、その偶然に対してラスコーリニコフが行動を起こす。そこで初めて偶然が必然になり、そして老婆が殺されるという運命に繋がっていく。このことから、偶然と運命は絡み合っていると思います。

偶然と運命に対するものすごく鋭敏な感受性というか、ユングの言うシンクロニシティー。ユングは、意味のあるシンクロニシティーは人間にとって非常に重要であると言います。つまり、何かと何かが同時に起きたとか、シンクロナイズドスイミングと同じように、合わせていく。今、僕がここで喋っていることとほとんど似たようなことをロンドンのどこのカフェで誰かが喋っているかもしれない。でも、それを知るのには神様しかいないわけです。そういうシンクロニシティーというのは常に起きている。小説の中でドストエフスキーは偶然を使ってストーリーを進めていきますが、小説の中よりも現実のほうが遥かに偶然性に満ちていると思



大逆事件を背景に、大石誠之助を主人公のモデルとした『許されざる者』がある。大石誠之助は最終的には死刑に処されるのですが、しかし、『許されざる者』の中では別の結末を迎える。歴史と物語が相反していて、歴史はカタストロフの方に進んでいくのに対して、逆に『許されざる者』の読者は、主人公・ドクトル横が救済されることでカタリスを得ることができるわけですから、現実にはカタストロフに向かい、しかし、物語はカタリスに向かうという、二つの方向性をこの小説全体が体現する形になっていると思います。ここで一つ質問としてあるのは、歴史上の事件をパステイシユするということに対する辻原さんの気持ちというか、動機というか、そのあたりの本心みたいなもの

います。僕がここに来たのも、亀山さんとの友人としての関係性も、皆さんがここに来られたのも何かの偶然。我々の日常、人生というのはほとんど偶然に満ちている。だから、小説の中で相当偶然を使っても全然問題ないと思うのです。それを必然、運命に変えるのがストーリーというか、論理であると思います。

亀山▼今、その話を伺いながら、私はとても幸せな気分になりました。というのは、文学館のホームページにブログ（「みねるば通信」）を連載しているのですが、その最新エッセーが「奇跡をめぐる平凡なめぐり合いについて」というタイトルなのです。世界中のありとあらゆる場所に奇跡が満ち溢れているんだと。ちよつとした偶然が一つのストーリーを生み、二度と起こり得

を聞きたいのですけれども。

辻原▼本心というか、歴史と物語は基本的に同じだと思います。神話から歴史と物語が分かれるのですが、神話の中ではこの二つは一つで、神話は神様の物語です。それが人間の物語になるときに、歴史と物語に分かれるわけですが、結局ヒストリーはヒズストーリーで、このヒズストーリーのヒズが神話の場合は神のことです。「彼」は神です。これが人間の社会になって、人間が物語を持つようになると、「彼」というのが集団や国であり、組織やあるいは個人だとか、そういうふうになんか小ざくなり、その「彼」の物語が小説になっていくのです。

だから、分け方としてはそんなに違わないと僕は思います。ただ、歴史というのは、既に起きたことが記録されて、でも、ストーリーにはなっていないのです。歴史の中にはある程度でも読み手、今の我々がその歴史を読むことで歴史に通るわけです。これは一種の物語になっているのですが、歴史というのは基本的にカタストロフです。破局が来るわけですから、破局が来ないとつまらないので、例えばナポレオンが敗れるとか、日本が太平洋戦争で敗れるだとか、徳川が幕末で倒れるとか、破局を描くと歴史は面白くなる。つまり、カタストロフが来るわけです。でも、小説というのは、そのカタストロフにプラスというか、カタストロフが同時に読み手にとってカタリスであるよう

ないものとして経験される。全てが奇跡なのだという話です。例えば散歩中にネコが横をばつと通り過ぎて奇跡だと思つて心の中が豊かになったり、野球帽をかぶつた中年の奥さんのジョギング姿を見て、ほほ笑みが湧いてきたりという、そんな、常識的にはとても奇跡とも呼べない偶然とのめぐり合いについてエッセーを書いたのです。じつは今日、文学館に向かう道すがら、これは辻原さんの文学について書いているのだなと思つたのです。辻原さんの小説では、小さな偶然が一つ起こると、そこから爆発的というか、バラの花が一気に開花するようにストーリーの世界が広がっていく。これが人生なのだということを辻原さんは教えている。しかも、その小さな奇跡というのは、やつぱり予測不可能なのです。散歩に出た時点では、自分の前をネコが通り過ぎるなんて予想はしていないわけですが、しかし次の散歩では、その小さな出会いが確実に意識されている。つまりストーリーの始まりです。そして、そうしたちよつとした奇跡が辻原さんの小説には無数に書かれています。

辻原▼運命という言葉。偶然、必然とか人生の予測不可能性、正にその通りですが、運命というのは、偶然を自分のものとして引き受けたときに初めてそれが運命になる。亀山▼引き受けるとはつまり……辻原▼引き受けるとは、例えばオイディプス王の話です。オイディプ

に作るのが小説家の一つの仕事ではないかと思

います。カタストロフは破局ですが、カタリスは一種の浄化です。ギリシア悲劇などを鑑賞して涙を流し、魂が浄化される状態がカタリスです。

人生の予測不可能性の探求

亀山▼対談の初めで、辻原さんの文学は人生の予測不可能性の探求、それが根本的なテーマなんだと言いました。当たり前ではないか、文学は全部そうではないかと反論する向きもあるかもしれませんが、予測不可能性という言葉には、運命あるいは宿命という問題と、人間の生命は最初から決まっています、道をずつと歩まざるを得ない形になっている、そんな運命論的なベシニズムが意識されているように思えてなりません。しかし、そこで運命と名付けられるものは、結構偶然の連続体としてあつて、結果として運命と名付けられるものにすぎないという言い方ももちろん可能です。僕にこんなことを言う資格はないのですが、最終的に運命という問題が辻原さんの最大のテーマなのだという気がしています。そこで、運命について一言、運命とは何かということの解説をいただきたいのと、おそらくは仰りにくいかもしれませんが、あまたある作品の中で辻原さんはどの作品を今、一推しされるか？私はいつも辻原公園をぶらぶら彷徨っていて、辻原さんはどれをご自分の最高傑作と思つているのだろうかと考えているので少しヒントを。

辻原▼運命というのは、運命を弄んではいけないス王は、自分の父親殺しとお母さんと結婚したことを知らないまま、しかし、父親殺しの犯人を自分が探偵になつて見つけようとします。自分であつたということが分かるわけです。それは全部が必然ではなく偶然だとか、本当はお父さんのだけけれども、その人と道で出会つて、相手があまり生意気なので殺してしまう。それは三つの道に分かれています。偶然出会つてしまつた。でも、それが実は自分の本当の父親だつたと展開していく。そのことを最後に全部自分で解明するわけです。自分で解明し、俺が犯人だつたんだと思つたときに、オイディプスは自分の父親殺しとしての運命を受け入れたということです。この受け入れたということをお父さんが見ると、観客はカタリスを覚えるのです。ところが、オイディプスはカタストロフです。完全な破局となり両目を潰す。でも、その両目を潰す行為そのものを見ている観客は涙を流して、オイディプスの悲しみを受け入れる。まさに運命というのは、人間が偶然に関与したときに初めて起きる現象と僕は思つているのです。

亀山▼有難うございました。でも、まだです。ラストの質問、最大の傑作は？

辻原▼それは全然分らないです。ただ、今書いているものが一番いいと思つています。宣伝になりますが、日経新聞の朝刊で連載している『陥穽 陸奥宗光の青春』。これは歴史小説ですが、これが最高傑作です。（満場の拍手）

亀山▼どうも有難うございました。



企画展

伊藤潤二展 誘惑
JUNJI ITO EXHIBITION: ENCHANTMENT

2024年4月27日(土)～9月1日(日)
*混雑時は入場制限あり

美しくグロテスクな世界を描き出す漫画家・伊藤潤二。
独創性あふれる作品は国内外の読者の心をゆさぶり、全世界を熱狂の渦に巻き込んでいます。

本展は伊藤潤二初の大規模な個展として、自筆原画やイラスト、絵画作品を展示します。デビュー作品の『富江』をはじめ、『うずまき』『死びとの恋わずらい』『双一』などのシリーズ漫画のほか、『首吊り気球』などの短編作品の自筆原画に加え、本展描き下ろしの新作も公開します。

人間の本能的な恐怖心や忌避感を巧みに作品に映し出しながらも、日常と非日常、ホラーとユーモアを自在に行き来する伊藤の作品世界に“震える”ひと時をお楽しみください。



伊藤潤二《富江》2000年
©ジェイアイ/朝日新聞出版

[観覧料]
一般1,000(800)円/65歳以上・大学・高校生600(480)円/小・中学生300(240)円/障害者手帳をお持ちの方500(400)円(但大学生以下は無料)。
*()内は団体割引と「せたがやアートカード」割引料金。

観覧チケット
オンラインチケット及び当日券を販売いたします。
*オンラインチケットの詳細は、世田谷文学館ホームページ(<https://www.setabun.or.jp/>)をご覧ください。
*電話でのご予約は受け付けておりません。

Special Exhibition
JUNJI ITO EXHIBITION: ENCHANTMENT

April 27th (Sat) - September 1st (Sun) 2024
* admission may be subject to restrictions at busy times.

Admission Fees
General admission: ¥1,000 (800); Over 65/ College or High School Student: ¥600 (480); Junior High and Elementary School Student: ¥300 (240); Disability certificate holders: ¥500 (400) yen (Disability certificate holders of college age and below are admitted free of charge)
* Amounts in parentheses group discounts and reduced rates for holders of the Setagaya Arts Card.

Exhibition Tickets
Online tickets and same-day tickets are available.
* For details regarding online tickets, please see the SETAGAYA LITERARY MUSEUM website (<https://www.setabun.or.jp/>).
* We cannot accept phone inquiries.

利用案内
開館時間:10時～18時(観覧会入場は17時30分まで)
休館日:毎週月曜日(月曜が祝日の場合は開館し翌日休館)
割引料金:企画展・コレクション展ともに団体(20名以上)は2割引。
*団体利用は事前にお問合せください。障害者手帳をお持ちの方は一般料金の半額。

世田谷区内在住の小・中学生は、土曜、日曜、祝・休日、夏休み期間中のコレクション展は無料。

交通案内:
京王線「芦花公園」駅南口より徒歩約5分
京王線「千歳烏山」駅南口より徒歩約13分
小田急線「千歳船橋」駅より京王バス(千歳烏山駅行)「芦花恒春園」下車徒歩約5分



2024年4月

伊藤潤二展 誘惑 5月
2024年4月27日(土)～9月1日(日) 6月

2024年4月20日(土)～9月1日(日) 7月

2024年4月20日(土)～9月1日(日) 8月

同時開催 ムットーニコレクション 9月

前期コレクション展

巴里土産 小堀杏奴油彩画展 ～滞欧作を中心に～

2024年4月20日(土)～9月1日(日)
*混雑時は入場制限あり

森鷗外の次女として生まれ、『晩年の父』(1936)、『朽葉色のショール』(1971)などで知られる小堀杏奴(随筆家 1909～1998年)は、幼少期から絵を描くことを好み、画家の長原孝太郎や藤島武二の下で油彩を学びました。32年から翌年にかけて、パリのアカデミー・ランソンへ通いながら画業に励み、帰国後は藤島の弟子の画家・小堀四郎と結ばれます。家庭を営むことで杏奴自身の画家としての歩みは半ばとなりましたが、その作品は世田谷区梅丘の旧宅に長年保管されてきました。

本展では、ご遺族から寄贈いただいた杏奴若き日の油彩作品とあわせ、森鷗外家族資料(パリから母や姉らに送った書簡等)を通して、小堀杏奴の生き生きとした画学生生活と、家族との深い絆をご紹介します。



小堀杏奴《街の風景(公園の子どもたち)》油彩 1933年頃 世田谷文学館蔵

[観覧料]
一般200(160)円/大学・高校生150(120)円/65歳以上・小・中学生100(80)円/障害者手帳をお持ちの方100(80)円(但、大学生以下は無料)。
*()内は団体割引と「せたがやアートカード」割引料金。

同時開催 ムットーニコレクション

Setagaya Literary Museum First Half Collection Exhibition

Souvenirs from Paris: Oil Painting by Anne Kobori - Centering on Pieces Created During her Time in Europe
April 20th (Sat) - September 1st (Sun) 2024
Concurrent Exhibition: Muttoni Collection
* admission may be subject to restrictions at busy times.

Admission Fees
General admission: ¥200 (160)/ College or High School Student: ¥150 (120); Over 65/ Junior High and Elementary School Student: ¥100 (80); Disability certificate holders: ¥100 (80) yen (Disability certificate holders of college age and below are admitted free of charge)
* Amounts in parentheses group discounts and reduced rates for holders of the Setagaya Arts Card.

Visitor Information
Opening Hours: 10:00 am to 6:00 pm (last admission 5:30 pm)
Closures: Every Monday (Closed Tuesday when a national holiday falls on Monday)
Group Discount: Groups of 20+ visitors will receive a 20% discount on admission fee both collection and special exhibitions.
Disability certificate holders will be admitted at 50% the general rate.
Elementary and junior high school students, who studies or resides in Setagaya city, are admitted free on weekends, national holidays, and during the summer holidays.

Access:
about 5-minute walk from Roka-koen Station's South Exit (Keio Line)
about 13-minute walk from Chitose-karasuyama Station's South Exit (Keio Line)
about 5-minute walk from Roka Koshunen (take Keio Bus from Chitose-Funabashi Station [Odakyu Line] towards Chitose-karasuyama Station [Keio Line])